（1） き　　く

防除法 病害虫名	防除のポイント	薬剤防除 防除時期	RACコード	薬剤
1 青枯病 *Ralstonia solanacearum*	1.さし芽床 ・無病の用土を使う。 ・清潔な水を使う。 2.本圃 ・病害発生地は連作を避ける。 ・発生株は早めに除去し、処分する。 ・排水をよくする。 ・蒸気消毒またはハウス密閉による高温土壌消毒を行う。 ・水田化する。 ・未熟な有機物施用は発生を助長するので、完熟堆肥を使用する。 **〈薬剤使用の特記事項〉** 1.消毒方法はⅢ－14. 土壌病害虫の防除の項参照。 2.クロピク８０、ドジョウピクリン、ドロクロールはネキリムシ類にも登録がある。	土壌消毒	－ － －	クロピク８０ ドジョウピクリン ドロクロール
2 半身萎凋病 *Verticillium dahliae*	1.さし芽床 ・無病の用土を使う。 ・清潔な水を使う。 2.本圃 ・病害発生地は連作を避ける。 ・発生株は早めに除去し、処分する。 ・排水をよくする。 ・蒸気消毒またはハウス密閉による高温土壌消毒を行う。 ・水田化する。 ・未熟な有機物施用は発生を助長するので、完熟堆肥を使用する。 **〈薬剤使用の特記事項〉** 1.消毒方法はⅢ－14. 土壌病害虫の防除の項参照。	土壌消毒	－ －・－	クロールピクリン （混）ソイリーン
3 立枯病 *Rhizoctonia solani* フザリウム立枯病 *Fusarium solani*	1.さし芽床 ・無病の用土を使う。 ・清潔な水を使う。 2.本圃 ・病害発生地は連作を避ける。 ・発生株は早めに除去し、処分する。 ・排水をよくする。 ・蒸気消毒またはハウス密閉による高温土壌消毒を行う。 ・水田化する。 ・未熟な有機物施用は発生を助長するので、完熟堆肥を使用する。 **〈薬剤使用の特記事項〉** 1.消毒方法はⅢ－14. 土壌病害虫の防除の項参照。 2.クロールピクリン、クロピク８０、ドジョウピクリン、ドロクロールはネキリムシ類にも登録がある。	土壌消毒	－ － － － －	クロールピクリン クロピク８０ ドジョウピクリン ドロクロール クロルピクリン錠剤
4 白絹病 *Sclerotium rolfsii*	1.高温時に多湿にならないようにする。 2.未熟有機物を多施用すると多発する。 3.被害残さは除去する。 4.発病地は連作を避ける。	発病初期	14	リゾレックス水和剤
5 褐斑病 *Septoria obesa*	1.窒素質肥料の過用を避ける。 2.病葉は早く除去して処分する。 3.通気をよくするため、下葉をかき取る。 4.露地ではマルチ栽培をする。 **〈薬剤使用の特記事項〉** 1.台風または集中豪雨の直後、必ず散布する。 2.サンヨールはアブラムシ類にも登録がある。	最終摘心から 切り花前まで	1 M5 －	トップジンM水和剤 ダコニール１０００ サンヨール
6 黒斑病 *Septoria chrysanthemella*	1.窒素質肥料の過用を避ける。 2.病葉は早く除去して処分する。 3.通気をよくするため、下葉をかき取る。 4.露地ではマルチ栽培をする。 **〈薬剤使用の特記事項〉** 1.台風または集中豪雨の直後、必ず散布する。 2.サンヨールはアブラムシ類にも登録がある。	最終摘心から 切り花前まで	M5 －	ダコニール１０００ サンヨール

きく

防除法 病害虫名	防除のポイント	薬剤防除 防除時期	RACコード	薬剤
7 白さび病 *Puccinia horiana*	1.耐病性品種を栽培する。 2.発病株からは採穂しない。 3.発病苗は利用しない。 4.発病葉は早く除去して処分する。 5.ハウス栽培では過湿過乾にならないようにする。 **〈薬剤使用の特記事項〉** 1.サンヨールはアブラムシ類にも登録がある。 2.エムダイファー水和剤はアルカリ性薬剤及び銅剤との混用及び7日以内の近接散布は避ける。 3.エムダイファー水和剤はさび病で登録がある。 4.サプロール乳剤はアルカリ性剤及び微量要素肥料との混用を避ける。 5.ストロビーフロアブルは薬害を避けるため浸透性を高める効果のある展着剤を加用しない。 6.ストロビーフロアブルは、キクに使用する場合には他剤との混用で薬害を生じるおそれがあるので避ける。 7.ストロビーフロアブルは、高温高湿条件下では薬害が生じる場合があるので使用しない。 8.発病後の薬剤防除は治療効果をあまり期待できないので、発病前からの防除が重要である。	発病前から	1 ベンレート水和剤 3 サプロール乳剤 3 セーフガード乳剤 3 ラリー乳剤 3 アンビルフロアブル 3 トリフミン乳剤 3 トリフミン水和剤 3 チルト乳剤25 3 マネージ乳剤 7 バシタック水和剤75 7 アフェットフロアブル 7 カナメフロアブル 7 パレード20フロアブル 11 ストロビーフロアブル 11 ファンタジスタ顆粒水和剤 11 メジャーフロアブル 39 ハチハチ乳剤 M3 アントラコール顆粒水和剤 M3 エムダイファー水和剤 M3 ジマンダイセンフロアブル M3 ペンコゼブフロアブル M5 ダコニール1000 NC カリグリーン － サンヨール
		ハウス内防除（くん煙）	3	トリフミンジェット
8 黒さび病 *Puccina tanaceti var. tanaceti*	1.耐病性品種を栽培する。 2.発病株からは採穂しない。 3.発病苗は利用しない。 4.発病葉は早く除去して処分する。 5.ハウス栽培では過湿過乾にならないようにする。 **〈薬剤使用の特記事項〉** 1.エムダイファー水和剤はさび病で登録がある。	発病初期	3 マネージ乳剤 7 アフェットフロアブル M3 エムダイファー水和剤	
9 うどんこ病 *Golovinomyces artemisiae*	1.発病苗は利用しない。 2.ハウス栽培では発病が見られ始めたらできるだけ通風を良好にする。 3.窒素肥料が過剰にならないように注意する。	発病初期	M5 ダコニール1000	
10 斑点病 *Cylindrosporium chrysanthemi*	1.連作を避けるか、前作の発病残渣は集めて処分する。 2.排水を良好にする。	発病初期	M5 ダコニール1000	
11 わい化病 ＣＳＶｄ	1.健全苗を植える。 2.発病株を早めに除去し、処分する。 3.使用する刃物は1％ホルマリンで消毒する。 4.挿し芽用土の再使用をしない。			
12 アブラムシ類 （ウイルス病 ＣＶＢ ＣＭＶ ＴＡＶ）	1.無病苗を導入する。 2.シルバーマルチ、シルバーストライプマルチ、シルバーテープを使用する。 3.ハウスの開口部に防虫ネット（1㎜目合以下）をはり、成虫の飛来を防止する。 **〈薬剤使用の特記事項〉** 1.エルサン乳剤はキクヒメヒゲナガアブラムシにのみ登録がある。 2.マブリック水和剤20は汚れを残すことがあるので、生育後期の散布は避ける。	定植時	1A ガゼット粒剤	
		発生初期	1A オリオン水和剤40 1B スミチオン乳剤 1B エルサン乳剤 1B トクチオン乳剤 1B オルトラン粒剤 3A アーデント水和剤 3A アグロスリン乳剤 3A スカウトフロアブル 3A マブリック水和剤20 4A アドマイヤー1粒剤 4A アドマイヤーフロアブル	

農薬の使用方法や注意事項はラベルで確認する

防除法 病害虫名	防除のポイント	薬剤防除		
		防除時期	RACコード	薬剤
	3.本虫対象にアグロスリン乳剤、マブリック水和剤２０で防除を実施しているところでは、オンブバッタの被害が少ない。なお、ミカンキイロアザミウマの項も参照すること。 4.アドマイヤーフロアブルは施設栽培のみの登録である。	発生初期	4A	モスピラン顆粒水溶剤
			4A	ダントツ粒剤
			4A	ダントツ水溶剤
			4A	アルバリン粒剤
			4A	スタークル粒剤
			4C	トランスフォームフロアブル
			21A	ピラニカＥＷ
			21A	ハチハチ乳剤
			29	ウララ５０ＤＦ
			－	オレート液剤
		ハウス内防除（くん煙）	3A	マブリックジェット
			4A	モスピランジェット
13 シロイチモジヨトウ	1.卵塊、幼虫集団を見つけたら摘除する。 2.ハウス開口部を防虫ネット（４㎜目合以下）で被覆すれば、飛来、産卵を防止できる。 **〈薬剤使用の特記事項〉** 1.発育が進むと薬剤の効果が極端に落ちるので、早めの防除を心がける。 2.防除した後も成虫が飛来、産卵するので、常に幼虫の発生に注意する。	発生初期（若齢幼虫期）	15	アタブロン乳剤
			18	ロムダンフロアブル
			22A	ファイントリムＤＦ
			22B	アクセルフロアブル
14 ハスモンヨトウ	1.卵塊、幼虫集団を見つけたら摘除する。 2.ハウス開口部を防虫ネット（４㎜目合以下）で被覆すれば、飛来、産卵を防止できる。 **〈薬剤使用の特記事項〉** 1.発育が進むと薬剤の効果が極端に落ちるので、早めの防除を心がける。 2.防除した後も成虫が飛来、産卵するので、常に幼虫の発生に注意する。	発生初期（若齢幼虫期）	1A	オリオン水和剤４０
			6	アニキ乳剤
			11A	ゼンターリ顆粒水和剤
			22A	トルネードエースＤＦ
			22A	ファイントリムＤＦ
			28	フェニックス顆粒水和剤
			30	ブロフレアＳＣ
15 オオタバコガ	1.ハウス開口部を防虫ネット（４㎜目合以下）で被覆すれば、飛来、産卵を防止できる。 2.１頭の幼虫が新芽を次々に加害するので、幼虫を見つけたら捕殺する。 **〈薬剤使用の特記事項〉** 1.発育が進むと薬剤の効果が極端に落ちるので、早めの防除を心がける。 2.防除した後も成虫が飛来、産卵するので、常に幼虫の発生に注意する。	発生初期（若齢幼虫期）	1B	オルトラン水和剤
			1B	ジェイエース水溶剤
			5	スピノエース顆粒水和剤
			6	アファーム乳剤
			6	アニキ乳剤
			11A	エスマルクＤＦ
			11A	デルフィン顆粒水和剤
			11A	フローバックＤＦ
			13	コテツフロアブル
			22A	トルネードエースＤＦ
			22A	ファイントリムＤＦ
			22B	アクセルフロアブル
			28	フェニックス顆粒水和剤
			30	ブロフレアＳＣ
			UN	プレオフロアブル
			5･18	（混）ファルコンエースフロアブル
16 ネキリムシ類	1.被害株周辺土中の幼虫が潜む穴を見つけ、捕殺する。 2.作付け前の圃場の除草処理を徹底する。	発生初期	1B	オルトラン粒剤
17 アザミウマ類	1.感染株を親株にしない。また、外部から苗を購入する際には虫の有無に注意するとともに、親株床での防除を徹底する。 2.侵入防止対策のとれているハウスでは、青色粘着トラップを吊るすことにより、密度を下げることができる。 3.ハウス開口部に防虫ネット（１㎜目合以下）をはり、成虫の飛来を軽減する。 4.圃場内及び周辺の雑草は、アザミウマ類の繁殖場所となるので、施設内外の除草を徹底する。 5.被害植物や雑草は、幼虫が逃げ出さないように土中に埋めるか、ビニール等で密封し、半月程度放置するなどして、二次伝染防止に努める。 6.ファインセーブフロアブルはヒラズハナアザミウマに対しては効果が劣るので注意する。	生育期前半	4A	アドマイヤー１粒剤
		発生初期	1B	トクチオン乳剤
			1B	トクチオン細粒剤Ｆ
			1B	オルトラン粒剤
			1B	オルトラン水和剤
			1B	ジェイエース水溶剤
			4A	アドマイヤーフロアブル
			4A	アドマイヤー顆粒水和剤
			4A	モスピラン顆粒水溶剤
			4A	ダントツ粒剤
			4A	ダントツ水溶剤

きく

防除法 病害虫名	防除のポイント	薬剤防除 防除時期	RACコード	薬剤
	6.栽培終了後は、施設内を蒸し込み、高温や絶食にすることによりアザミウマ類を死滅させ、周辺への分散を防止する。 7.ハウス栽培では収穫終了直後に圃場の地表面を透明フィルムで全面被覆し（夏場の晴天日であれば１日処理が目安）、地温を50℃以上に上げると、土中の蛹を死滅させることができる。 8.ミカンキイロアザミウマにより、トマト黄化えそウイルス（ＴＳＷＶ）、キク茎えそウイルス（ＣＳＮＶ）が伝搬される場合があるので、感染株を見つけしだい抜き取り、圃場外に持ち出し、処分する。 **〈薬剤使用の特記事項〉** 1.ハウス等の高温になる場所で越冬するので注意する。 2.密度が高くなると防除効果が劣るので低密度時の散布を心がける。 3.開花後は密度が急増するので注意する。 4.本虫対象にトクチオン乳剤、細粒剤Ｆで防除を実施しているところでは、オンブバッタの発生と被害が少ない。 5.アドマイヤーフロアブル、顆粒水和剤は施設栽培のみの登録である。 6.本虫対象にアーデント水和剤、モスピラン顆粒水和剤、コテツフロアブル、アファーム乳剤、スピノエース顆粒水和剤で防除を実施しているところでは、オンブバッタの発生が少ない。 7.マイコタールは施設栽培のみの登録である。	発生初期	4C	トランスフォームフロアブル
			5	スピノエース顆粒水和剤
			5	ディアナＳＣ
			15	マッチ乳剤
			21A	ハチハチ乳剤
			21A	ハチハチフロアブル
			34	ファインセーブフロアブル
			34	アベンジャーフロアブル
			5･18	(混)ファルコンエースフロアブル
			－･5	(混)ダブルシューターＳＥ
18 ミナミキイロアザミウマ		定植時または生育期	1A	オンコル粒剤５
		発生初期	13	コテツフロアブル
			15	アタブロン乳剤
19 ミカンキイロアザミウマ （ウイルス病 ＴＳＷＶ ＣＳＮＶ）		発生初期	1A	オンコル粒剤５
			3A	アーデント水和剤
			4A	アクタラ顆粒水溶剤
			6	アファーム乳剤
			15	カスケード乳剤
			13	コテツフロアブル
			－(生)	(生)マイコタール
20 ハダニ類	1.ハウス栽培の場合にはハウス開口部にビニールによる折り返し（ダニ返し）をする。 2.圃場内の収穫終了後の株や周辺雑草は発生源となるので、これらの処分、除草に努める。 3.作物残さや雑草は、除去後に土中に埋没するか、ビニール等で密封し、半月程度放置する。 **〈薬剤使用の特記事項〉** 1.サンマイトフロアブルはアブラムシ類にも登録がある。 2.ガードホープ液剤はナミハダニに登録がある。	発生初期	1B	トクチオン乳剤
			1B	ガードホープ液剤
			3A	アーデント水和剤
			6	アグリメック
			13	コテツフロアブル
			21A	ダニトロンフロアブル
			21A	ピラニカＥＷ
			21A	サンマイトフロアブル
			10B	バロックフロアブル
			20B	カネマイトフロアブル
			25A	スターマイトフロアブル
			－	サフオイル乳剤
			－	エコピタ液剤
			－･5	(混)ダブルシューターＳＥ
		ハウス内防除（くん煙）	3A	テルスターゼッ ト
21 マメハモグリバエ	1.外部から苗を導入する際には虫の有無に注意する。 2.ハウス開口部に防虫ネット（１㎜目合以下）をはり、成虫の飛来を軽減する。 3.マルチ栽培は土中での蛹化防止に有効である。 4.被害植物や雑草は除去後に土中に埋没するか、ビニール等で密封し、半月程度放置する。 5.改植時には土壌消毒を行い、蛹を死滅させるか、次回の作付まで20日程度おいて、羽化してきた成虫を餓死させる。 6.侵入防止対策のとれているハウスでは、黄色粘着トラップを吊るすことにより、密度を下げることができる。 7.ハウス栽培では収穫終了直後に圃場の地表面を透明フィルムで全面被覆し（夏場の晴天日であれば１日処理が目安）、地温を50℃以上に上げると、土中の蛹を死滅させることができる。	定植時	4A	アルバリン粒剤
			4A	スタークル粒剤
		発生初期	1B	カルホス乳剤
			1B	オルトラン水和剤
			1B	オルトラン粒剤
			1B	ジェイエース水溶剤
			4A	ダントツ水溶剤
			4A	アルバリン顆粒水溶剤
			4A	スタークル顆粒水溶剤
			5	スピノエース顆粒水和剤
			15	カスケード乳剤
			17	トリガード液剤
			21A	ハチハチ乳剤

きく

防除法 病害虫名	防除のポイント	薬剤防除 防除時期	RACコード	薬剤
	〈薬剤使用の特記事項〉 1.発生初期の防除を徹底する。 2.他のハモグリバエ（エカキムシ）には有効な薬剤でも、本虫には効果が低い場合があるので注意する。 3 4.ダントツ水溶剤はナモグリバエにも登録がある。			
22 オンシツコナジラミ	1.苗による持込みに注意する。 2.ハウス開口部に防虫ネット（1㎜目合以下）をはり、成虫の飛来を軽減する。 3.圃場内及び周辺の雑草処理を徹底する。 4.ハウスでは黄色粘着トラップを使用する。 5.被害植物や雑草は除去後に土中に埋没するか、ビニール等で密封し、半月程度放置する。 6.栽培休止期に施設を密封し、ハウス内温度が50℃にまで達すれば、コナジラミ類を死滅させることができる。			
23 ネグサレセンチュウ	1.水田化する。 2.連作を避ける。 **〈薬剤使用の特記事項〉** 1.消毒方法はⅢ－14．土壌病害虫の防除の項参照。 2.バスアミド微粒剤、ガスタード微粒剤、ディ・トラペックス油剤は、センチュウ類（ハガレセンチュウを除く）で登録がある。 3.クロピクフロー、キルパー、ビーラム粒剤、ソイリーンはネコブセンチュウにも登録がある。	植付前	1A 8B 8F 8F 8F － 8A･8F 8A･8B	ガゼット粒剤 クロピクフロー キルパー バスアミド微粒剤 ガスタード微粒剤 ビーラム粒剤 (混)ディ・トラペックス油剤 (混)ソイリーン
		生育期	1B	ガードホープ液剤
24 ハガレセンチュウ	1.被害株から採穂しない。 2.被害葉は早く除去して処分する。 3.発生地で育苗及び栽培をしない。	生育期	1B	ガードホープ液剤
25 ネコブセンチュウ	1.水田化する。 2.連作を避ける。	定植前	1B	トクチオン細粒剤F